

ハムレットと眉輪王と

小堀桂一郎

森鷗外が明治三十五年五月一日発行の「歌舞伎」第二十四號に發表した短いエッセイに「ハムレットと烏鷄國太子」といふのがある（現在全集第二十五卷所収）。署名は「觀潮樓主人口述」としてあるから、雜誌記者が鷗外の口述を筆記した一文であらう。その要旨は、題名の示す如くで、シェイクスピアの有名な悲劇の主人公ハムレットの遭遇と、『西遊記』に挿入されてゐる烏鷄國の話の中の王子のそれとを比較考究したものである。鷗外は、へ余は昔年初めてシエクスピアのハムレットを読みし時、その事蹟の支那小説西遊記中、烏鷄國太子の上と甚く相似たるに驚きたり」と語り出し、一席の談話であるから兩テキストを手許に置いてといふわけではなく、唯記憶に基いての比較であるらしいが、兩者の類似點を三點擧げてゐる。

一、双方とも一國の王が殺害されて、その下手人が現に王位に就いてゐる。王子は現國王が自分の父を殺した犯人であ

ること知らずにそのまま王子の地位に居る。

二、國王の殺害が王宮の庭の花園の中で行はれること。

三、殺された國王の亡靈が現れて、犯罪の事實を告げ、復讐を依頼する。但し、デンマーク王の亡靈は直接息子なる王太子の前に出現するが、烏鷄國の王の靈は三藏法師の夢の中に現れ、三藏が孫悟空にそれを語り、悟空が王太子に注進に及ぶ、といふ形をとる。

その他、似てゐる筋の中での彼此相異なる些細の點は、興味を抱かれた讀者各位が實際に読み比べて確認された方がよいであらう。

鷗外は同じ時期に「袈裟と王旻が妻と」を同じく「歌舞伎」に口述して掲載せしめてゐる。自分が愛する者の身代りとなつて殺される女、といふ古今東西を通じての一つの劇的類型の存在に鷗外は興味を寄せたのではないかと思はれ、私はかつてシュトゥッケン作鷗外譯「飛行機」の解題の中で、西

洋文學中のこの類型にふれて、鷗外の關心の在處をいささか穿鑿したことがある。明治三十年代といふこの時期に、鷗外が「狹義の」比較文學的研究題目とでも稱すべきテマトロジの分野にも興味を寄せてゐた形跡のあることは面白い。

ハムレットと烏鷄國太子との比較には、「歌舞伎」の編輯者である、鷗外の弟の三木竹二（森篤次郎）も興味を唆られたらしく、次の様な編者付記をつけてゐる。

へ觀潮樓主人の説に依りて、ハムレットと西遊記の契合の奇なるを知るに附けて、八犬傳にて赤岩一角が怪猫の爲に喰殺され、その靈が犬飼現八に見えて復讐の事を托し、現八が犬村角太郎を助けて父の仇を報せしむるの一條は、全く西遊眞詮中なる烏鷄國王の事を翻案せしことを覺り得たり。これにて和漢洋三幅對となりしは、愈々奇なり。〴

生來氣樂な人だつたらしい三木竹二は、いとも簡単に、これにて和漢洋三幅對、などと言つてゐるが、鷗外はもちろんハムレットと烏鷄國太子の遭遇の類似を、共通材源を有する故の契合と斷定したわけではない。へハムレットの傳説は、古くサクソオ、グランマチイクス(Saxo Grammaticus)の礎馬史に出で、太子は基督世紀前五百年頃の人なりといふほどだが、へ此二説話の類似は、果して偶然にして然るや。又はパンカタントラム(Pancatantram)等印度の古傳説中、更に此二説話の本源たるものあるにはあらざるか。好事の人

は検討して可なりとて、パンチャタントラあたりに共通材源を探つては如何か、といふ示唆を與へてそこで話を停めてゐる。

私もまあ物好きの部類に屬する方だらうから、この記事には夙に氣がついて好奇心を動かしてゐたが、さて不精と怠惰の故になかなかこの題目の検討にはとりかからない。そこで横着な話だが、いつの頃からか、若い研究者諸氏に向つて、誰かこの題目を手にかけてみませんか、などと機會ある毎にたきつける様になつた。しかし、やつてみませう、と言ふ人は未だかつてあらはれない。あまり執拗く持ち出すと、そんなら御自分でやつたらよいでせう、と逆ねぢを喰ひさうで少々氣のひけることではある。此度本誌に寄稿を依頼されたのを機會に、さてそれはいよいよ手を着けようか、と一旦は思ひ立つたのだが、頭の働きの方にもやはり「貧乏暇無し」の法則はあてはまると見え、どうしてもこれだけの手数をかけるべき時間をうみ出せない。

そこでふと思ひついたことがある。ハムレットと烏鷄國太子とをつなぐべき未發見の鎖の環があると假定した場合、その環を探索し、發見するまでにはよほどの手数を豫想しなければならず、しかも失はれたその環を見出せるといふ保證はどこにもない。しかし、元來未知の契合點の探索を前提としない、つまり影響關係といふものを最初から度外視してかか

つた比較作業ならば、何の豫備作業も、材料集めもなしに、直ちにとりかかれるわけである。『ハムレット』（この場合、シェイクスピアの悲劇として完成したあの形だけを考へておけばよいと思ふが）はさうした別の脈絡に於ても、様々の比較分析の試みを施すのに適した、まさに無限の寶庫にも似た作品であると言へよう。

此處に私が試みるのは、標題の如く、眉輪王の境遇もハムレットとよく似たものであつた、しかしその行動はハムレットのそれとは實に對照的な、あつといふ間の早業だつた、條件が似てゐながら、實現がこれだけ相異なつた、こんな話もあるものである、といふ一場の紹介にすぎない。

眉輪王の物語は『日本書紀』に詳しい。『古事記』には目弱王の名で出てくる。その他『扶桑略記』『帝王編年記』『水鏡』等にも述べられてゐるが、それら後世の記述はいづれも『日本書紀』の記事に基いて書いたものにすぎないやうである。ただ『水鏡』の如くそれ自身が始終『扶桑略記』のやき直しにすぎないとみられてゐる。二流の史書でも、まさにその翻案の仕方、作者の潤色した部分に、その時代に似つかはしい「解釋」が加はつてくるといふ面白さはある。そして言ふまでもないことだが、後世からの解釋でも最も注目すべく重要なのは『愚管抄』である。何しろ日本の歴史上、現に御在位の天皇の暗殺といふ事件は百二十四代の天皇のうち、た

だ二件だけ生じてをり（二件も起れば十分に多い、といふ見方もあるかもしれないがその議論はさて置いて）、蘇我馬子の崇峻天皇弑逆事件に先立つ、つまり史上最初の天皇暗殺事件がこの眉輪王による安康天皇の殺害である。著名なる「道理史觀」の樹立者たる慈圓大僧正が、眉輪王のひきおこした暗殺事件の扱ひに苦慮し、何とか道理に基いて説明すべく腐心したであらう様子はその行文のうちに明瞭にすけて見える。謂はば同情を禁じ得ぬ次第である。

しかしここでは事件に對する後世の歴史家の批判には立ち入らない。主として『書紀』に據つて事件の概略を記してみれば次の通りである。

第二十代の安康天皇は父允恭天皇の第二子（或いは第三子）である。以下簡便のために天皇は全て諱名ではなく諡號で記しておく。安康天皇は即位して間もなくのこと、弟の雄略のために、自分の叔父に當る大草香皇子（仁徳天皇の第五子、即ち允恭天皇の弟）の妹なる幡梭皇女を得てこれに娶はせようとした。健康がすぐれず前途に不安をいだいてゐた大草香皇子は、自分の死後に妹が心細い境遇に陥るであらうことを案じてゐたのでこの求婚を心から喜び、家寶としてゐた押木珠纒なる品を添へて妹を皇弟に獻らむと答へた。ところがこの求婚の使者に立つた根使主なる朝臣が邪悪な男で、幡梭皇女の嫁資なる押木珠纒が欲しくなり、それを横領し、天皇に

對しては、大草香皇子が無禮な言辭を構へてこの求婚を拒絶した、と復命するのである。思慮淺き安康天皇は直ちにこの讒言を信じ、怒りに驅られて兵を出し、大草香皇子を攻めて殺してしまつた。そしてその結果として初めの計畫通り、皇子の妹幡梭皇女を弟の雄略の嫁に迎へ、更に皇子の妻であつた中蒂姫を宮中に入れて自分の妃とした。

この事件の起つた時、安康天皇は五十二歳である。殺された大草香皇子の年は記したものがない。中蒂姫の年齢も傳はらないが、この時姫には五歳になる男の子眉輪王がゐた。以てこの夫婦の大凡の年恰好を推定できよう。その兄を殺害することまで敢てして奪ひとつた形の幡梭皇女は、大草香皇子の言葉によればへ陛下其の醜きことを嫌ひたまはずして云云といふからあまり美人ではなかつたのだらう。一方、五歳の男の子の母であつた中蒂姫は美人だつたのではあるまいか。安康天皇は、この女性を甚だ寵愛し、事件の翌年には正式に皇后としてゐる。そこで中蒂姫の子である眉輪王も宮中に養はれてたぶんは大切に育てられてゐた。

この状況を中蒂姫に就いてみると、直接の下手人といふわけではないであらうが、とにかく安康天皇は亡夫を殺害した犯人である。その仇敵に、亡夫の子を連れて嫁いできて、そして愛されて一應の幸福を得てゐる、さういふ形である。父が殺された時五歳だつた眉輪の王は、もちろん安康天皇が

父の仇だといふことを知らない。母に連れられて宮中に入つてきて、今風に言へば天皇を養父と思つて暮してゐたのであらう。

事件は、中蒂姫が皇后に立てられた翌年に生じた。つまり姫が安康帝に再嫁してからわづか二年目、眉輪王七歳の時のことである。

天皇は八月山莊に行幸して水浴し、そのあと樓に上つてうちくつろいで酒を酌んだ。これも今風に言へば温泉場に避暑に行つて涼しいところで休んで一杯飲んだ、といふほどの情景である。寵愛の皇后、大草香皇子の未亡人中蒂姫を侍らせ、てゐたことは言ふまでもないが、眉輪王も一緒にこの山莊に連れて行つてゐるのだからこの養子を相應に可愛がつてゐたのではなからうか。

そこで生じた事件は書いてみれば至つて簡單なことで、「日本書紀」の行文をなるべく假名を多く用ゐて書き下してみると――

三年の八月に、穴穗天皇（安康天皇）、沐浴せむと意ほして、山宮にみゆきす。遂にたかどのに登りましてみあそびしたまふ。よりて酒をめしてとよのあかりきこしめす。しかうしてすなはち、み心とけ樂しみきはまりて、まじふるにものがたりを以てし、ひそかに皇后に語らひてのたまはく、「吾妹、汝は親しくむつまじしといへども、朕、おれ眉

輪王を畏る」とのたまふ。肩輪王、わかくして樓下に遊び
たはむれて、悉くに、ものがたれることをききつ。既にし
て穴穗天皇、皇后の膝に枕したまひて、晝醉ひしてみねむ
りしたまへり。ここに肩輪王、其のとくみねませるを伺ひ
て刺し殺しまつる。

『書紀』では、天皇が何故に肩輪王をおそれるのかといふ
ことがあからさまには言表されてゐない。この點では『古事
記』の記述の方がよほど物語的に明快である。これは岩波文
庫本（倉野憲司校注）の書き下し文をそのまま引用してみる。

これより以後、天皇神牀に坐して晝寢したまひき。ここに
その後に語りて曰りたまひけらく、「汝思はず所ありや」
とのりたまへば、答へて曰したまひけらく、「天皇の敦き
澤を被りて、何か思ふ所あらむ」とまをしたまひき。ここ
にその大后の先の子、目弱王、これ年七歳なりき。この王、
その時に當りて、その殿の下に遊べり。ここに天皇、その
少き王の殿の下に遊べるを知らしめさずて、詔りたまひし
く、「吾は恒に思ふ所あり。何ぞといへば、汝の子目弱王、
人と成りし時、吾がその父王を殺せしを知りなば、還りて
邪き心あらむとするか」とのりたまひき。ここにその殿の
下に遊べる目弱王、この言を聞き取りて、すなはち天皇の
御寢しませるをひそかに伺ひて、その傍の大刀を取りて、
すなはちその天皇の頸を打ち斬りて、都夫良意富美の家に

逃げ入りき。

この二つの記述を合せて互ひに缺けたところを補ひ合つた
のが『扶桑略記』の文だといふことになる。安康天皇が長兄
木梨輕皇子を伊豫に追放して皇位に就いたのが五十二歳の年
であり、程なくして大草香皇子殺害のことがあり、そしてそ
の遺児肩輪王に斬殺されたのが五十四歳（「古事記」では五
十六歳と明記してゐる）の時だからわづか三年の短い在位で
あつた。

さて二流の史書たる『水鏡』が、『扶桑略記』の漢文を假
名混りの讀み下し文に書き改めた程度のものでありながら、
やはり古代のそれとは明白に違つたものである文章感覺を以
て潤色を施してゐる、と思はれるのは次の様な點に於てであ
る。

サテ此御門御即位三年ト申シ、八月ニ、御門樓ニ登リ給テ、
ミキナンド進メテ遊給シニ、后ノミヤニナニ事カオボス事
ハアルト申給シカバ、后ノ宮、御門ノ御イトウシミヲ蒙レ
リ、何事ヲカ思ヒ侍ベキト申給。御門仰ラレテ云ク。我身
ニハ恐ル、事アリ、此マ、子ノマユハノ皇子、ヲトナシク
ナリテ、我彼父ヲ殺シタリケリト知りナバ、定テ此マ、子
悪キ心ヲ發シテント宣フヲ、此マユワノ皇子、樓ノ下ニ遊
アリキテ聞給テンケリ。サテ御門ノ醉テ彼ノ后ノ御ヒザヲ
枕ニシテヒル御トノ籠タルヲ、側ナル太刀ヲ取テ、マユワ

ノ皇子ハマ、父ノ御門ヲアヤマチ奉テ、逃テ大臣ノ家ニ御座ニキ。

前記『愚管抄』がこの事件に論評を加へるにあつて先づ述べてゐる事の粗筋は、この『水鏡』の文を引いてゐると見られ、行文はほとんど同じである。あまり尊重せられぬ史書だとは言つても、『水鏡』ともなると、時代の然らしむる所か、記紀の簡淨素朴な行文に比べてみると、やはり心理觀察的な陰影が自づからに眞はつてきてゐる趣きが看取れよう。

つまり『水鏡』で讀んでみると、安康天皇が叔父の大草香皇子を殺してその未亡人を自分の妻として以來、妻がこの自分をいつたかどう思つてゐるのか、といふ事を絶えず氣にかけてゐる心理状態がそこに浮き出てゐる。平生は彼はそんな疑惑を自分の口の上せることすら憚つてゐたのであらう。ただ言葉に出さぬといふばかりではない、自分が現在の妻の前夫を殺した男であるといふ自覺を、彼は意識の表面から抑壓して、なるべく考へない様にしてゐたことであらう。何しろ彼は自分が殺した男の遺兒たる眉輪王が、といふより「將來」の眉輪王の存在が恐しくて仕方がないのである。天皇とその妻の連れ子との關係を『水鏡』の筆者がはつきりと「繼父」「繼子」と書いてゐるのは、現代の我々の受取り方と全く同じである點も面白い。

この様に、自分が殺した男の未亡人を奪つて自分の妻とし、

その妻が自分と亡夫とを對比してどう考へてゐるであらうかと絶えず氣にかけ、またその遺兒が將來自分に向けてくるかも知れない復讐の刃に戦々競々としつつも、表向きはその繼子を可愛がつて避暑の遊びにも母親と共に連れ歩いてゐる、これはまことにクローディアスの狀況そのままではなからうか。志賀直哉には、彼としては極めて異色の短篇『クローディアスの日記』があること周知であるが、言つてみればあの中のガートルードを中蒂姫に、ハムレットを眉輪王に置換へてみれば、あれはそのまま「安康天皇の日記」といつた寓話的一篇に翻案することもできさうではないか。

『水鏡』に記された天皇と皇后との問答、「ナニ事カオボス事ハアル」「御門ノ御イトウシミヲ蒙レリ。何事ヲカ思ヒ侍ベキ」といふ簡單なやりとりも、『古事記』に於ける、「汝思はず所ありや」「天皇の敦き澤を被りて、何か思ふ所あらむ」といふのをそつくり敷き寫したのにすぎない様でありながら、しかも微妙に或る種の含蓄を増幅するに至つてゐるのは、これには『古事記』にはなくて『日本書紀』の方には書かれてゐる前提狀況、これが酒を飲んでくつろいだ舉句ついで口に出してしまつた不覺の一句であるといふ與件が記されてゐるからである。安康天皇はここで、自らは決してそれにふれるべきではなかつた己の急所に、ついにふれてしまふといふ弱さを露呈したわけである。中蒂姫の方では、自分と自

分の亡夫の遺児の現在と將來とがあげて天皇の手に委ねられてゐるといふ現在の境遇を片時も忘れるわけにはゆかない。だから、その内心は如何であらうとも、こんなに愛して頂いて、何の不満もあるわけがございません、と答へるより他なかつたであらう。一見如何に不倫の女に見えようとも、クロードィアスに對するガートルードの答も、安康天皇に對する中蒂姫の場合も、女の答は常にさうであらざるを得ないだらう。

しかしハムレットと眉輪王との間に對照的ともいふべき行動の差が生じてくるのはここからあとの筋書に於てである。亡き父と、その弟である今の繼父と、そして母との間に伏在する恐しい秘密を知つた後のハムレットには周知の如く長い複雑な狐疑逡巡と慎重に過ぎるほどの物心兩面の準備期間とが必要だつた。それに對し眉輪王の復讐の決行はまたあまりにも早すぎる。七歳の童児は樓の下で遊び戯れ乍ら、繼父と母との間で交された、恐しい秘密にふれた會話をふと洩れ聞いただけである。それだけでも彼は、その時その場に於て、母の膝を枕に酔ひ臥した繼父の首を斬り落してあつさりと復讐を遂げてしまふ。その際母の中蒂姫がいつたい眉輪王の咄嗟の行動を妨げたのか、黙認したのか、それとも積極的に幫助したのか、記紀以來これについての傳聞乃至推定を述べた史書は一篇も管見に入つてゐない。

話はこれだけである。ハムレットと比較しての單なる紹介の試みとしても、少し長く書きすぎた様にも思ふけれども、一方、安康天皇の陥つたクロードィアスの狀況に就ては、更に深く分析し、更に廣く比較の項目を列記しての考察を試みる人が現はれてもよい様に思ふのだがどうだらうか。それとも、これもハムレットと烏鷄國太子との共通材源の探索といふ場合と同様、つまらぬ思ひつきであり、私の徒らなる勸奨といつたことに終るのであらうか。

〔附記〕 眉輪王の事件を題材とした文學作品としては近松の時代浄瑠璃『浦島年代記』が知られてゐるけれども、これは標題の示す如く、浦島太郎傳説と絡み合せてあつたり、事件の筋書にもあまりに自由な脚色が施してあつたりで、『ハムレット』と並べて考へてみる様な性格のものではない。ただその様な試みがあつたことを挙げるにとどめておく。